

はじめに

第一章 華嚴という見方——鈴木大拙翁とともに

11

今の世を覆う「覇権主義」

聖武天皇が深く傾倒した華嚴の教え

毘盧遮那仏の光が遍く一切を照らす

月の光を「菩提心」としてイメージする

みんな「雑」で序列はない

七福神の宝船が象徴する世界平和の姿

すべては心が作り出している

一滴の雫が大宇宙を宿している

華嚴思想の四つの見方

自他が礙げなく溶け合う「事事無礙法界」
事事無礙法界は「大悲心」によって実現する
五十三人の師に教えを乞う善財童子の旅
華嚴の教えて日本仏教をまとめなおす
我々の菩薩行こそ、世界を飾る花である

第二章 「覇権主義」を溶かす思想——華嚴と日本仏教の教え

東日本大震災十三回忌に思うこと

「覇権主義」に染まる世界

「覇権」ともう一つの「ハケン」

脳内に浸透する「覇権思想」

未来のシミュレーションに溢れる世の中

現象の半分は「因果律」では説明できない

「目的合理性」が苦しい今をつくりだす

異なる考え方や偶然を排除する風潮

『忘れられた日本人』のコミュニケーション合理性
ラオスの会議には「レジュメ」がない
覇権主義を溶かすのは「宗教の行」
同じ場所にいるだけで、命は「同期」する
生成AIによる極端な功利主義のゆくえ
目標を持ちながらも自由であるために

大乘仏教の完成形としての『華嚴経』

お釈迦さまが悟られた「縁起の法」とは

ロゴス的な世界とレンマ的な世界

量子力学の登場によって「客観」がなくなった

「相補性」を含んだインドの論理学

「相即相入」して生き延びた我々の命

他宗教の神も包摂した仏教

縁起について——お釈迦さまの悟りとは

「気」は因果律を超えた世界を知るヒント
ある種の必然は「偶然の顔」をしてやってくる
「相即相入」の中にある我々の身体

悟りを開いた時、お釈迦さまが眩いたこと
尋常ではない「不殺生」へのこだわり

縁起の法⇨悟りの世界

物事が起こる二つの原理——「異時」と「同時」

「量子もつれ」を認めなかったアインシュタイン

アインシュタインが量子力学を拒絶した背景

「因果」よりも「縁起」に注目した南方熊楠

脳をもった我々とは異なる植物の智慧

ホモサピエンスにおける言葉や音楽の発生

人類に残された「事事無礙法界」の力

莊子が教える「私」を放棄する方法

華嚴の世界観は「気」の考え方によれば理解しやすい

全身の細胞は各々にあらゆる能力をもっている

人生の最期に悟る「事事無礙法界」

おわりに

第一章 華嚴という見方

鈴木大拙翁とともに

今の世を覆う「覇権主義」

今回「華厳という見方」というテーマでお話ししたいと思ったのは、今の世の中を眺めていて、終戦直後に鈴木大拙先生が華厳の教えに特に注意を喚起されたことを思い出したからです。今の状況は戦中や終戦直後に似ていてではないでしょうか。たとえば北朝鮮の暴走がありますし、中国とアメリカが睨み合っている。日韓関係も過去最悪と思えます（当時は菅義偉政権と文在寅政権）。また国内では新型コロナウイルスの流行による自粛と、それを見張る自粛警察が生まれています。

戦時中の翼賛会という組織をご存じでしょうか。日中戦争が長引き日米関係も悪化していく中で、第二次近衛内閣が「大政翼賛会」という組織をつくるのですが、要は権力の意思を自主的に付度して応援する集団です。自粛警察もそうではないでしょうか。政府もそれを当てにできるから、欧米のように「都市封鎖」しなくとも、この国ではいわゆる「自粛」で済んでいるような気がします。

また、「ニューノーマル」とか「新しい生活様式」ということも言われています。岸田國土賞で知られる戯曲作家の岸田國土をご存じかと思えます。当時の方が大政翼賛会の文化部長だったので、「生活の黎明」と題する文章を書き、「物がなくて貧しい生活になるけれども、こ

れは新しい生活の黎明だ」と国民の間に窮乏生活に耐える心構えをつくろうとしたのです。

今はそれから日本学術会議ですか。学術会議の推薦名簿から六人を外した問題でも、なぜ外したのかを政府は一向に説明しようとしません。理由を言わないということとは、つまり付度しろということでしょう。国民に付度を迫る。今はそういう時代なのですかね。第二次大戦中、あるいは終戦後の雰囲気と酷似している気がして仕方ありません。

こんな世の中の状況を見ながら、大拙先生の言葉を思い出したのです。

「今日の世界が、どうしてこうなったかというに、それは力というものを、重んじすぎたからである。第一、第二の世界戦争のものは力の争いである。自分の力で他を圧しようとするからである。自分さえ勝手ができれば他はかまわぬと考えるのは昔からあるが、近代では、それが集団になった。自国他国とむやみに区別をつける。近ごろは主義の上に区別をつけ、それを暴力で実行せんとする」（『東洋的な見方』）

なんとなく、今の時代の話のように聞こえませんか？ 今の世の中を覆っているのは、第二次世界大戦の時と同じ「覇権主義」の考え方なのではないか。そしてこの覇権主義の考え方を溶かす一番の特効薬が、華嚴の思想なのではないかと思うのです。

聖武天皇が深く傾倒した華嚴の教え

大拙先生は昭和二十一年四月に、昭和天皇皇后両陛下の前でご進講をされます。それは後に加筆修正されて、『仏教の大意』という本になりますけれども、戦後間もない時期に両陛下にご進講した仏教のエッセンスは、まさに華嚴なのです。

「華嚴」という言葉はあまり一般的ではないと思いますが、紀元前後からインドで大乗仏教が興隆する中で、四世紀頃に中央アジアで『華嚴経』というお経がまとめられます。それが中国に伝わって漢訳され、さらに時代が下って、唐の時代に法蔵という方が「華嚴宗」という宗派を打ち立てます。

それが聖武天皇の時代の日本に伝わり、法蔵から直接教えを受けた新羅の審祥しんしょうというお坊さんが招かれます。聖武天皇は三年にわたって、その方の華嚴の講義を聴く。天皇家は新しい思想の摂取に非常に熱心だったのですね。日本のお坊さんでは良弁りょうべんが華嚴の教えをマスターして、東大寺が華嚴宗の中心になります。

当時、なぜ『華嚴経』が渴望されたのかと言いますと、この時代は外国との交流が非常に盛んでした。そうすると、今の新型コロナウィルスではありませんが、病気も一緒に渡ってきました。もともとは人間が動物を飼育することで、その動物の持っている病気（ウィルス）が、人間にも感染できるように進化したわけです。

例えば麻疹はしかは、犬から来たと言われます。天然痘は牛からではないかと言われています。インフルエンザを人間に直接媒介したのはアヒルだと言います。

聖武天皇の時代には天然痘が大流行しました。しかも飢饉が続いて、人々がたいへんに苦しんでいた。しかも今では「新型のコロナウイルスのせいだ」とわかりますが、ウイルスが発見されたのは十九世紀ですから、当時は原因がぜんぜんわからなかった。なんだかわからないけれども、人がバタバタと倒れて死んでいく。

当時の考え方からすれば、誰か恨みをもって死んだ人の怨霊のせいではないか、あるいは神仏の罰ではないか。そういうふうにも考えても無理はありません。そこで新しい教えを求め、新しいお経を唱えれば疫病の流行も収まってしまうのではないかと、いろいろなお経に注目していくわけです。

聖武天皇は飢饉が頻発し、国民の間で疫病が流行る状況に対して、驚くほど深い反省を示しています。これは聖武天皇が実際に書いた文章を訳したのですが、「まことに朕ちんの不徳によってこの災厄が生じたのである。天を仰いで慙はじ、恐れている」「少しも安らかな気持ちになれない」。そう記しています。そして、今の政府は消費税を上げたばかりですけれども——聖武天皇は民の窮状を想って免税にしたのです。

また聖武天皇の奥さんは光明皇后ですが、この方は国とはまた別に施薬院、悲田院という福

社施設を生家である藤原家のバックアップでつくりまします。施薬院というのは菓草ほぞくを作つて施す場所、悲田院は生活困窮者に寝る場所と食べ物を与える施設です。こういう福祉施設を天皇家自らがつくられたのです。

華嚴の教えを聞いた聖武天皇は、その教えを学ぶ道場として東大寺を建て、華嚴の世界の象徴である「毘盧遮那仏びるしゃなぶつ（ヴァイローチャナブツダ）」（東大寺では「盧舎那仏」と呼ぶ）を造ろう、それによつて疫病も退散するのではないかと考えました。こうして建立されたのが東大寺の盧舎那仏、奈良の大仏です。

大仏建立は、天然痘と飢饉で本当にわけもわからず、大勢の人が死んでいく中で、なんとか天皇の思いが天に届かないかという祈りが背景にあつたと思います。しかし、大仏をつくるには人々の雑役が必要ですし、たくさんお金もかかる。聖武天皇も相当悩んだと思います。しかし、やはり毘盧遮那仏をつくることで人々の苦しみを救いたい。そういう欲求が勝つたのでしょう。幸い行基という絶大な協力者を得て、なんとかこの偉業は成し遂げられたのです。

大拙博士はそのような歴史も踏まえた上で、昭和天皇に『華嚴経』のエッセンスをお話しにされたのではないかと。戦争が終わつて、天皇陛下も責任を感じていらしたのだらうと思ひます。戦後はいわゆる闇市の時代で、国民は日々の食べものにも困る窮乏状態でしたから、おそらく「朕の不徳の致すところ」だと思われていただらうと思ひます。そんな時に、華嚴の教えを

ぜひ天皇陛下御夫妻に聞いてもらいたいと、大拙先生はご進講をしました。その内容をまとめた『仏教の大意』には、こんなことが書いてあります。

『華嚴経』に盛られてある思想は、実に東洋——インド・シナ・日本にて発展し温存せられてあるものの最高頂です。般若的空思想がここまで発展したということは実に驚くべき歴史的事実です。もし日本に何か世界宗教思想上に貢献すべきものがあるとすれば、それは華嚴の教説にほかならないのです」

東洋の宗教思想の中でも、最も誇るべき考え方がこの『華嚴経』にあると仰おっしゃっているわけです。この後、大拙先生は華嚴の研究を推し進めて、昭和三十年に法蔵館から『華嚴の研究』という本を出されます。ただ、おそらく『華嚴経』への情熱はすでに戦前から涵かん養ようされていたのだろうと思います。

毘盧遮那仏の光が遍く一切を照らす

今日はどこまで話せるかわかりませんが、『華嚴経』の内容をかいつまんでお話ししたいと思っおもっています。

『華嚴経』は「六十華嚴」や「八十華嚴」など何種類かあるのですけれども、いずれも単独のお経がいくつか集まったものです。お経にはこういうものが多いですね。はじめから誰かが